

候群は胃切除後遺症6例および吻合病12例の計18例である。

脂肪および脂肪酸の吸収試験成績では術後症候群で正常値をとるものは1例もなかった。その他肝疾患、腹腔内癒着などでも軽度障害例がかなりみられた。

Albumin の吸収試験成績では消化管疾患、肝疾患で異常例が多く、術後症候群の2例も軽度障害であった。

犬の腸管を使ってしらべたブドウ糖、<sup>131</sup>I-albumin および<sup>131</sup>I-olein 酸の腸管部位別吸収能をみると、前者は空腸で、後2者は回腸でより良く吸収された。

同様にして犬の腸管を使い triolein の吸収成績におよぼす消化酵素製剤の影響をみると、酵素製剤を添加した場合の吸収率は添加しない場合の30~60%増であった。

吸収試験の悪かった症例と同様の腸吻合を犬に造設してその吸収をみると、回腸を転置した場合は triolein、albumin 共吸収障害がみられた。一方空腸を転置した場合には、albumin の吸収が障害された。

腸吻合を造設した犬の肝を病理組織学的に調べた結果、吸収成績の悪いもの程肝細胞脂肪変性、混濁腫脹および肝糖原顆粒の減少、さらには間質の小円形細胞浸潤がみられた。

以上の様な吸収不良症例では一般に消化酵素製剤が有効であった。

## 90. 慢性脾炎における<sup>131</sup>I-Oleic acid, <sup>131</sup>I-Triolein 吸収試験について

○佐藤邦夫、工藤祐三  
(岩手医科大学・第1内科)

1963年8月以降、1964年8月までに当内科に入院した工藤氏前腹壁脾臓圧診点の陽性なるもので、臨床症状、脾内・外分泌機能などより慢性脾炎と診断した患者を使用して、脂肪吸収試験を行ない、なおなんらの消化器疾患も有しない患者を対照とし対比検討した。

<sup>131</sup>I-oleic acid 吸収試験：対照患者6例の血中放射能%の最高値到達時間は、平均値では4時間に peak を有し、その値は $11.4 \pm 4.4\%$ で、9.5%から14.6%の範囲にある。一方慢性脾炎患者12例の最高値到達時間は、平均値では4時間に peak を有し、その値は $12.3 \pm 7.9\%$ で、9.9%から19.1%の範囲にあり、慢性脾炎患者群と対照群との間に有意の差は認められず、吸収機能は異常ないものと推察される。

<sup>131</sup>I-triolein 吸収試験：対照患者10例の血中放射能%の最高値到達時間は、平均値では4時間に peak を有し、その値は $14.9 \pm 5.2\%$ で、14.1%から17.4%の範囲にある。

慢性脾炎患者45例の最高値到達時間は、平均値では4時間に peak を有し、その値は $11.2 \pm 29.0\%$ で、12.0%から21.9%の範囲にあり、慢性脾炎患者群は対照群の標準偏差の下界に位置し、その間に明らかな差異を認める。Ruffin らの報告にしたがい4,5,6時間値の平均8%以上を正常、5%以下を高度障害、5~8%の間を中等度の障害とすると、対照群の平均値では14.6%，慢性脾炎群では11.7%で、中等度障害20%，高度障害11.1%，計31.1%に<sup>131</sup>I-triolein 吸収障害を認めた。

50%ブドウ糖負荷試験の回復時間と、<sup>131</sup>I-triolein 吸収試験の障害度とは比例しないが、負荷試験で陰性のものに triolein の吸収障害はみられなかった。

工藤氏前腹壁脾臓圧診点：慢性脾炎患者においては、P点は80%に陽性、浮腫P点は100%に陽性である。<sup>131</sup>I-triolein 試験で障害を認めるもの31.1%は、P点、浮腫P点とも+~++を呈している。圧痛の程度と障害度とは必ずしも平行しない。

自覚症状、胃液酸度、血清コレステロール値等と<sup>131</sup>I-triolein 試験との間にとくに相関関係は認められない。

わたくしの実験では吸収障害は認めず、消化障害が31.1%に認められた。

## 91. <sup>131</sup>I-Triolein および<sup>131</sup>I-Oleic acid の腸管吸収および腸管吸収後の代謝動態

増田正典、細田四郎、○西村二郎  
藤田圭吾、吉川邦生、藤木幸雄  
(京都府立医科大学・増田内科)

腸管吸収に関する知見は近年徐々に解明されつつあるが、なお吸収の機構や吸収後の代謝については未知の事実が多い。臨床的に吸収不良症候群の診断には種々の方法が考案されているが、消化吸収試験には<sup>131</sup>I-triolein および<sup>131</sup>I-oleic acid による試験がもっとも広く用いられている。

今回はこの試験の信頼性を知る目的のために、経口的に投与した<sup>131</sup>I-triolein および<sup>131</sup>I-oleic acid の腸管吸収および腸管吸収後の代謝について検討した。

実験方法：体重120g前後の雄性 Wistar 系ラットに<sup>131</sup>I-triolein および<sup>131</sup>I-oleic acid を1匹あたり $1.2\mu\text{c}$ 投